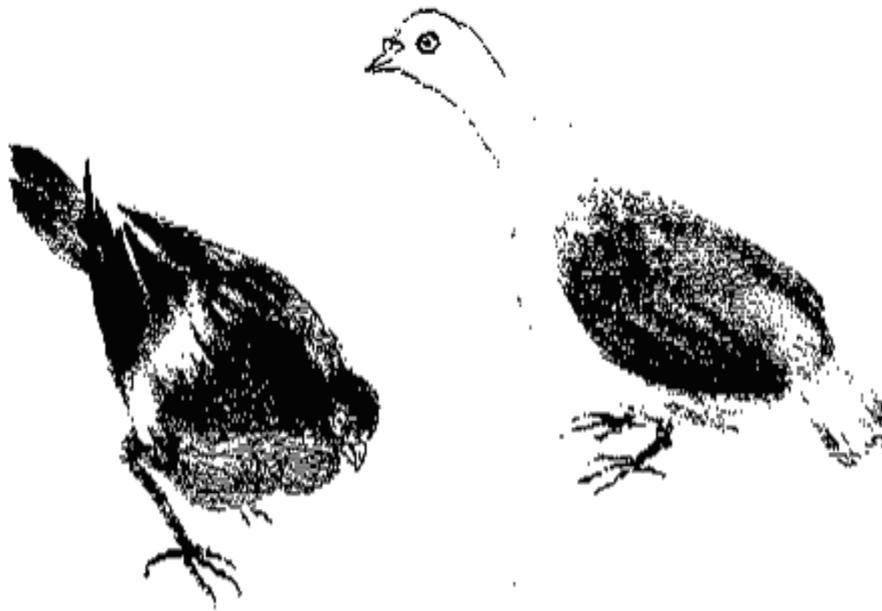


第2部

平和祈念文集

【小学生・中学生の部】



※ 学生の学校名及び学年は平成21年現在のものです。

【小学生・中学生の部】

同じ星に生きている僕たち

第一小六年 小熊 康太

地球にはいろいろな国があります。暑い国や、寒い国、広い国や、せまい国、裕福な国や、貧しさに苦しむ国など、地球の中にはたくさん国があります。その中で髪の毛や肌の色がちがったり、生活の環境がちがっていても僕たち人間は、みんな同じ地球の中で毎日を生きています。

テレビのニュースや特集番組で、世界の子供たちの姿や、国同士の戦争についての映像が流れています。貧しくて死にそうになっている子供たちや、銃で撃ち合っている人々などを見ると、僕は悲しい気持ちになります。

世界の人々は「平和」を願っているのに、なぜ多くの人々が苦しんでいるのか、僕は考えてみました。「平和」という言葉は、僕のイメージでは「幸せ」ということです。

今の僕は、恵まれない国の子供たちに比べてとても豊かで幸せな暮らしをしていると思います。僕には大切な家族がいて、おいしい物が食べられて、住む家があって、学校で勉強することができます。そんなことを当たり前に思っていた僕だけれど、住む家や着る物もなく、学校にさえ行けない子供たちの姿を見ると「今の僕はなんて幸せなんだろう」と思います。そして同じ地球に生きているのに、なぜこんなに生活の仕方がちがうのか、不思議に思います。でも、もしかしたら、貧しい国の子供たちは、家族や友達がいるというだけで「幸せ」だと感じているのかもしれない。だけど、病気になった

時に十分な治療を受けられずに命を失くす子供たちがいるというのは、とてもつらいです。どんな国の、どんな環境の中で生きていても、生まれてきた命の重さは、みんな平等で同じだと思います。全ての人々がそんな風に、命を大切に思う気持ちを持つていれば、人間同士が憎み合ったり傷つけ合ったり、国同士が争い合うことなく、みんな仲良く平和に暮らしていると思います。そして、そんな優しい気持ちが地球環境への思いやりに、つながると思います。

僕は毎日の暮らしの中で、小さな幸せに感謝することを忘れずに、この星の平和を願い続けたいと思います。

平和と争い

第一小六年 橋本 雅拓

この作文を書くこうと思ってからぼくは、平和と争いとはどういう関係なのだろうと思いました。そこで疑問を解決するためにこの作文のテーマを「平和と争い」にしたのです。

まず平和という言葉で思いつくのは、争いがないということです。争いがないといろいろな人がしつとやうらみをもつ可能性は低くなりますが、争いをさけるために人に合わせてしまい、新しい考え方や意見、思っていることなどが出なくなるかもしれません。もっと悪ければ、発明が少なくなる、改良しなくなる、アイデアが出にくくなってしまふ可能性がありません。

となると争いが全くないのは平和とはいえるけれど人間が進歩しなくなるのです。では人間を進歩させる上に平和と言え

る方法はないのでしょうか。ぼくはあると思います。人間を進歩させてなかつ、平和といえる世の中にする方法は適度な争いです。適度な争いとは、戦争などの人の命をうばう争いをせず、議論など意見を言い合える争いをすることです。戦争をしなければ、ぼくげきなどで土地があらされたり、食料を確保する人手や場所が失われません。またきちょうな資源を戦争のために使ったりしなくてすみます。また、議論をすれば、自分の意見が言えるし相手の意見を聞いて新しい考えがうまれてきたり、新しいアイデアがうかぶと思うからです。

現在でも、ウイグル自治区と中国政府のように武力を使った争いがおきています。争いの原因はしん略のため、宗教や人權のちがいなどです。戦争をしても何も解決できないということの世界の人々が改めて心に刻みこみ、ねばり強く話し合いを重ね解決の糸口をさぐる。これが戦争をふせぐ唯一の方法だとぼくは思います。

世界は本当に平和を望んでいますか？

第二小六年 田中 暁乃

私は平和について深く考えたことはありませんでした。私にとって平和は当たり前だったからです。ですが二学期のある日、私は平和について考えさせられました。ある日道徳の授業で、「地雷」についてネットで調べることになったのです。

調べていくと私はある文に目を疑いました。その文には…

「今もたくさんの団体が地雷除去運動に貢献しているが、今も地雷は埋め続けられている」と書いてありました。

えっ？そう思ったと同時に怒りのような、悲しいような感情がわきあがりました。今もなお、戦争や地雷で苦しんでいる人達がいて、その人達を救おうとがんばっている人もいるのになぜそんなことをするのでしょうか。本当に心から平和を望んでいるのなら地雷を埋めるなどという残酷なことはできないはずです。

本当に世界は平和を望んでいるのでしょうか。

さらにある日、TVを見ているとこんなことを言う人がいました。

「世界が平和になるには人間が絶滅するしかないのです」

反対です。世界を平和にするために、人間が絶滅する理由はあるのでしょうか。すべての人達が平和を望んで行動すればいつか平和は訪れるはずです。みんなでおしゃべりしたり遊んだりとみんなが笑っていられる幸せをすべての人が心から望むこと、それが平和につながるのだと思います。

私は全ての人に問いかけてみたいと強く思います。

「みなさんは、本当に心から平和を望んでいますか？」

平和な世界と命の大切さ

第二小六年 吉田 真惟子

日本は、戦争をする兵などを持たない、二度と戦争をしないと誓った平和で豊かな国です。私は日本に生まれたから、戦争を授業や、資料でしか知りません。けれど、昔も日本は戦争をし、ハワイの真珠湾を攻撃したり、原爆を落とされたりしました。今は平和な日本も、北方領土や、沖縄のアメリカ軍基地などの問題を抱えています。

けれども、この問題も世界からみたら小さな問題で、世界には、地雷や、いまだになくならない戦争の問題があります。今、世界には約一億一千万個の地雷があります。それは、国境に、埋められていたりします。地雷を取り除く作業が今もさかれています。まだたくさん地雷があります。そして、子どもの命もたくさん奪われています。

内紛などでもたくさん命が奪われています。戦争が終わったばかりの国は、食料や水、薬などが一切なく苦しい状況で、そこでも命が奪われます。

日本は、平和な国で、命が戦争によって奪われることがなくなりました。世界から見れば日本は平和な国です。でも、放火や、殺人等の問題があります。平和な国なのにいらいらしたから等という理由で、大切な命をとるのはとてもひどいことです。人は生きるために、牛や豚、鳥、魚等の命をもらわなければいけません。でも、人は人を食べません。自分が生きるために命をもらう相手ではありません。だから命を大事にし、平和な日本を大切にして、世界を平和にしたいです。

「平和」について考えたこと

第三小六年 大森 あゆみ

今の日本は平和だと思いますか。という質問をされたら、はい、と答えると思う。

戦争をしていない、という点では平和である。争っていないければ、平和だ、と考えるのが当たり前なのかもしれない。平和、を辞書で調べると、

①戦争もなく世の中が穏やかである・こと

②争いや心配事もなく穏やかである・こと

と、書かれていた。確かに①は正しいと思う。②の心配事は、誰にでもあるから、正しいとは言いきれないと思う。

今、世界には、核兵器がたくさんあるらしい。そして、日本は唯一の被爆国らしい。わたしは、それだけで、日本は、世界は平和ではないのではないか、と思う。でも、思わない人もいる。

そうになると、平和の基準、平和である、と言える基準は何だろう、と思う。誰かが決めているわけでもないのに、ほとんどの人が、日本は平和だ、と言う。

いろんなことを考えて、でもわたしは、日本は平和だと思う。

世界も平和だ、と言えるような未来になってほしいと思う。

小さなことを積み重ねて・・・

第三小六年 湯下 奈波

平和とは、一体どういうことなのでしょう。私は、争いがなくて、平穏な日々を送れていることだと思います。例えば、私達小学生なら、朝は母親の作った朝食を食べ、その日の天気合った服装をし、学校に行けば友達がいって、放課後は友達と遊び、そして帰る場所がある。そういった“普通”な日常が一番平和なんだと思います。だから、今そのような生活を当たり前のように過ごしている私達は、平和に過ごしているということですよ。

しかし、どこの国もそのような日々を過ごしているわけではありません。例えば、日本でも活動しているユニセフ募金は、第二次世界大戦の犠牲になった児童に送る募金です。この犠牲になってしまった児童達は、今、平和に過ごしているのでしょうか。募金の活動のおかげで、前よりはよくなったかもしれませんが、日本に比べたら、全然平和でないと思います。私は、世界中の人達が平和に過ごしてほしいのです。核兵器なども全部取りのぞかれてほしいのです。その願いは、どうしたら叶えられるのでしょうか。私はまず、みんなが平和について考えてみて、一人一人が関心を持ち、募金などの運動に協力すれば、今すぐにはできなくても、何年も先にはもしかしたら平和になるかもしれないと思っています。私は、どんなに小さなことでも、一人一人が続けていけば、いつかはわからないけど、必ず大きなことに変えられると信じていますから、時間をかけてゆっくと、でも確実に、自分達ができることをして、世界が平和になることを心から祈っています。

「平和について」

第四小六年 大塚 菜未

私は平和と聞くと、広島や長崎の原子爆弾を思い出します。その他にも戦争やテロなどいろんな事が起こり、尊い命が失われています。

戦争やテロは、一瞬に何万もの沢山の命が失われることはあまりありませんが、原爆は日本がもう少し早くポツダム宣言を受け入れていれば、ある日一瞬にして何十万という沢山の命が奪われてしまうこともなかったのかも……。何故原爆が落とされたのか。

平和というのは、戦いなどがなく、人々が自由にできることだけではなく、一人一人が今を楽しむことも含めているのだと思います。

原爆は、アメリカによって落とされたが日本にも非があったのではないかと思います。お互い反省して、悪かったところを認め合うのが大切なことだと思います。

しかし、アメリカや日本の中には私達は悪くないと思っていますが、その考え方はやめて周りに目を向けることが必要だと思います。そうしなければ、原爆を通じて何かを学んで欲しいと思いつつながら亡くなってしまった人達の思いが伝わらなくなってしまうと思います。

私は今の世界を幸せだと思つてはいけないと思います。世界中のどこかでは、テロ・戦争・殺人などの出来事が起きていくからです。それらの事から目を離れた瞬間、この世界にはとつても大きな境ができると思います。そして、それは現実か

ら目を離した悲しい行為だと思っています。

自分が幸せならそれでいい。それは違います。私は、世界中の全ての人が幸せならそれでいい。だと思っています。それを実現させるなら、幸せな人がそうでない人に手を差し延べてあげる。そうすれば「この地球に生きている全ての人が幸せに」が実現すると思います。

平和と戦争

第四小六年 柴田 拓

今、ぼくの生活の中で不自由なことは何もありません。暖かい部屋に住み、食事も三度必ず食べることが出来ます。おやつだって食べられます。学校にもきちんとして通っています。

今年の冬休みの宿題は書き初めとカンボジアについての調べ学習でした。

書初めの題目は「平和な国」です。書初めの紙やスミは十分に用意してもらえました。

調べ学習のカンボジアについては、遺跡について、地雷についてなどのことを知ることができました。

カンボジアの国内には地雷がまだたくさんうまっているそうです。

戦争や内戦のためです。そして、この地雷などを完全になくさないうちは、まだまだ戦争は終わっていないと思います。日本でも戦争の被害者がたくさんいます。広島や長崎の被爆者の方々がそうです。原爆症で苦しんでいる方がまだたくさん

います。

ぼくたちの生活する現在の日本には戦争は起こっていません。しかし、生活はだんだんと格差社会が激しくなり、この年末始のニュースでも働きたくても仕事がない人。家の無い人、などの内容を伝えていました。

これからのぼくたちの務めはそういう中でも強い精神力と体を持ち、しっかりと生きていくことだと思います。

人が人を傷つけたりするようなことが無いように人同士が殺し合いをする戦争のようなことを起こさないような世界にしていきたいと思います。

みんなが平和に暮らせるようにと新年の初めに思いました。

今年の冬休みの宿題は自分の生活のありがたさ、またこれからの人々の平和について考えさせられるものでした。

戦争と平和

湖北小六年 小野 涼夏

私は、学校で戦争と平和についてのビデオを見て、なぜ戦争をしたのかと思いました。

ビデオの中の少女たちは私たちとそんなに年れいも変わらないのに、毎日戦争におびえながら生活していました。そればかりではなく、今の私には考えられないこともありました。

たとえば、自分の服のことまで指示されていたということです。私はとてもいやな気持ちになりました。そして、私は今の

生活が幸なんだと実感しました。

家に帰ってから見たビデオの事を家族に話してみました。すると、お父さんの知り合いに実際に原爆で被爆した人がいると聞きました。その人は、たった一瞬の出来事で下半身が動かなくなり、死ぬまでねたきりの生活になってしまったそうです。また、結婚も出来なくなってしまうということです。原爆がなければ、自分の好きな事だって出来ただろうし、ふつうに動けて、もしかしたら結婚して幸せな家庭を持っていたかもしれせん。

本人も大変ですが、介護する家族も苦勞します。

この勉強をする前までは、自分は戦争に全然関係ないと思ってました。まして、原爆なんて……。でも実際にこういう事が起きていたのは、正直悲しいです。

今の日本は平和な国だと思います。でも世界のどこかの国では、まだきちんとした食事もできずに死んでしまっている人もいると聞いています。そのことを考えると今の日本はぜいたくすぎると思います。私たちは物を大切に、食べ物大切にしていかなければいけないと思います。そして私たちが努力して全部の世界の国が平和にしていかなければいけないと思います。

戦争について

湖北小六年 酒井 邦彦

昔は戦争が多くて平和な世の中ではなかったが、今では戦争がなくなつてとても平和になった。それほど昔は戦争があつた。戦争は今では考えられないことのように思え、そして、社会も大きく変化した。戦争がおきていた当時、人々は平和をうばっているそうした戦争がなくなることを願っていただろうと思う。

広島では二十数万の死者を出し、罪も犯していない人が犠牲になった。それほど戦争はおそろしい。

広島に原子爆弾が投下された時に破壊された原爆ドームが、戦争というおそろしさを今も伝えている。そして、今は世界遺産にもなっている。

戦争に行った親が死んでしまつたり、戦争が始まつたせいで親とはなればなれで暮らすことになつたりする。子供たちにとっては悲しくさびしいことだつたと思う。

つい最近では、「核不拡散と核軍縮」をテーマに、アメリカのニューヨークで国連安全保障理事会の会議が行われた。ここでは、「核兵器のない世界」が決議された。世界ですべての核兵器がなくなるのはとても時間がかかるし、いつになるかわからないが、この決議が達成されれば大きな進歩だと思う。

社会は生まれ変わっていくと思う。

ぼくたちは今、ふつうに食べ物食べている。しかし、昔の人々は戦争のために食べる物がなく、苦しい生活を送っていた。

そのことは決してわすれてはいけない。

今、ぼくはユニセフ募金に協力するなど、自分にできることを考えている。

戦争がなくなり、そしてその平和を守っていくのがぼくたちの役目だとも感じている。

世界平和への願い

布佐小六年 増元 琴奈

私は、六年生の社会の授業で日本の戦争をしていた時代のことを初めて知りました。私は、日本はずっと今みたいに平和で外国にボランティアに行ったりして、助け合って生きてきたのだと思っていたので、日本も昔、他の国にひどいことをしてきたという事実を知り、とても悲しかったです。

私は、広島県の原爆ドームを見に行った時、とてもびっくりしました。広島私が歩いた場所は、今は道路になっているけど、原爆を落された時はいつしゅんにして広島の前でなくなってしまうとは、ぜんぜん思えませんでした。原爆ドームが今、そのまま残されている意味を私達はちゃんと考えて、原爆が落とされた当時の人々の苦しみや様々な思いを大切にして、そしてこのおそろいでき事を一生忘れずに生きていかなければいけないと思いました。

今も、世界の国々のどこかで戦争がされていて、苦しんでいる人達がいるのなら助けてあげたいです。小さな子供や生まれたばかりの子供などたくさんの人達が苦しむのは本当に悲しいことだと思います。

日本国民は、戦争の苦しきを知っているからこそ、二度と戦争はせず、今戦争で苦しめられている人々を助けあげて、世界中の戦争をなくしていきたいです。そしてもう二度と、このようなことがおこらないように、戦争があつたできごとは忘れずに、世界中の人々が平和で安全な楽しい暮らしができるようになってほしいです。

そして、私達も自分にできる事から少しずつ協力して、苦しんでいる多くの人達を助けてあげられると、すごく良いと思います。

世界平和をめざして！

布佐小六年 ミルザイ サミラ

今、日本は平和ですが、他の国では、戦争によつて、苦しい思いをしている人々があります。なんで戦争を始めるのでしょうか。いろんな人々が被害にあつて、苦しみ、死者がたくさんでるとわかっているのに。どうしてそんなに国を広くしたいのかわかりません。戦争はただ、人々の心に大きな傷をつくり、多くの人々を苦しめるだけ。なにもいいことはありません。それを、同じ生きている人間が始め、そして、しんじられないほど人を苦しめています。戦争を始める人間の気もちが、私にはわかりません。

私は、世界が平和になり、苦しむ人がなくなるように、願っています。私は、「戦争をしよう」と思う人は、いなくなつてほしいと思います。戦争のおそろしさをみんなに知ってほしいです。そして、平和であることは、どれほど素晴らしいの

かも知ってほしいです。

今の日本。今の日本はとても平和です。平和主義がつくられて、ほんとうによかったと思います。でも、いろいろな戦争の話などをきくと、もっと早く平和主義の考えができていたらなと思います。今、日本が平和であるのは、多くの人々の気持ちがあったからだと思います。「自分がすごく悲しい思いをして、大切な人をうしなった。もうだれにもそういう思いをさせたくない」という人々の強い気持ちがあったからこそ、日本は今こうして平和な国になっていると思います。

他の国の人々たちも、苦しい思いをしてると思うので、日本だけではなく、他の国々の人たちにも平和で、明るくらしをしてほしいと私は、願っています。

これからは、世界平和をめざして、いろいろな人が「平和っていいね」といえるような、世界にしていきたいです。

「食料で苦しむ人々」

湖北台西小四年 関口 サムエル

家で世界地図を見ているとぼくは、必ず思うことがあります。

それは、この世界では、ぼく達のようにゆたかな国ばかりではなく、まずしい国では、食べる物もなく、苦しんでいたり、戦争で生きたくても生きることができない人がたくさんいるのではないか。このしゅん間にもうえて人が亡くなっているのではないのかと。

それに比べて、ぼくは、食べる物も良く、すごく良い生活をしていると思います。

ぼくは、良い生活をしているけれど、世界はどうなんだろうと思い、パソコンで調べてみました。

そこには、現在、世界の人口は六十八億三千九百四十二万人いると書いてあり、千の位の数は、一秒毎に増えています。そして、世界中で一年間に、六千万人が亡くなり、一億四千万人の命が生まれています。世界では、毎日三万人の子供達がうえ死にしている、一カ月には約九百万人、一年には、一〇九五万人がうえで死んでいます。

ではなぜうえ死にしまうのでしょうか。

実は、世界には食料はあります。しかし、経済的豊かな国が買いしめてしまい、なくなってしまうのです。たとえば日本も食べ物などを買いしめてしまいます。西小では、牛乳は一年間に九千四百本すてられています。おなじく給食も残菜としてすてられています。

ぼくには、きれいな食べ物がいっぱいあります。ごはんを食べる時、きれいな物があると父は、

「ちゃんと食べなきやだめだろ、このごはんをアフリカの子供達にあげたら、すごい喜ぶぞ、食べ物に感しやして食べなきやだめだぞ」と言います。ぼくは、これからは、きれいな物でも少しづつ食べれるようになりたいです。

今は世界中の人が力を合わせて世界をよくしていかなければとぼくは、思います。

平和のつくりかた

湖北台西小 六年 吉村 彩香

私は、戦争が大きいです。それはみんなと同じです。でも「平和が大事だ」「戦争反対」というだけでは戦争を防ぐことはできません。では、どうすれば戦争を防ぎ平和でありつづけることができるでしょうか。

まず、基本的なことから、考えてみると、平和とは形あるもの、つまり机、えん筆などはちがって、物ではなくて状態、つまり、「様子」や「ありさま」なのです。だから、平和を物としてつくることはできないのです。私は、この話を聞いて平和とは、保つものだと思いました。例えば、りっぱな家を建ててもずっと快適に住むことができません。ずっと快適に住むには、毎日そうじをして、何年かごとに屋根やかべをぬりかえなければなりません。平和でありつづけることもこれと同じだと思います。平和をつづけていくには、私達が常に努力していく必要があるのです。

次に、世界の事実を知ろうと思いました。コスタリカという国があります。コスタリカは、武器を放棄した平和な国といわれます。でも、それは事実とちがうのです。コスタリカには軍隊があります。となりの国、中国は世界最大二三〇万という軍隊を持っています。そして現在チベットを攻めこんでたくさんの人を殺しているらしいのです。私は、この話を聞いて、だれかがまちがってこの話をしてしまったのではないか、また真実はだれにも分からないのではないかと感じました。でもこれが世界の事実なので、どこの国でも戦争をやっているのかもしれない。

なぜ争い事が起こるのでしょうか。それは人を思いやる気持ちが欠けているからだと思います。私達人間は、戦争のない平和な未来を築かなければならないと思いました。そのためにも一人一人が世界の事実を知り、平和の作り方を、自分で考

え、自分で行動していく必要があると思います。

平和への願い

高野山小六年 海野 友香

『平和』とはいったい何なのでしょう。戦争も平和のためには必要なことだと言う人もいます。でも、戦争で涙を流す人もたくさんいるのです。

私は、戦争の苦しみも悲しみも、何も知らない小学生ですが、戦争のぎせいになり、苦しんでいる人たちの力になりたいと思っています。でも今は戦争で苦しんでいる人たちを救う力もお金ありません。そんな私が、戦争をしている人たちやその家族を「かわいそう」と思うのは『上から目線』かもしれませんが、同じ地球という星に生まれた仲間として力になりたいのです。

戦争は環境を破かいし、たくさんの人を奪い、たくさんの人に悲しみを与えます。相手を殺してしまった人たちだって、その後に苦しみが待っていると思います。『人を殺した』という、心に深い傷を負うのです。戦争をしてみんなが幸せで、平和になど暮らせるわけがありません。

また、今地球は環境破かいが進み、ほろんでしまうかもしれないと言われています。そんなときに戦争などしていたら、ますます環境が破かいされていきます。

生き物はみんな生きる意味を持って生まれてくるのです。地球は誰のものでもありません。私たちみんなのもので。戦争によって命や環境を奪い合う権利などありません。あつてはならないことです。私は児童会でペットボトルキャップを集め、アフリカの子どもたちにワクチンをおくる活動をして、できることを頑張ってきました。

私は願ひ続けます。いつか、世界が平和になり、みんなが幸せにくらせることを。そして地球が自然あふれる素晴らしい星にもどってくれることを。

平和になるために

高野山小五年 新戸 将希

今、日本はとても平和ですが、外国では戦争で一度にたくさん命がうばわれてしまい、うえで食べる物がないため苦しめられる人々がたくさんいるのです。

ぼくが平和になるために考えたのは「地雷」についてです。地雷は、ふんだ人の手足をふきとばす悪魔の兵器です、地雷は人にふまれるまで土の中でずっと待ち続けています。そんなおそろしい地雷が現在世界に約二億個も埋められているのです。そして、毎日約十六人、九十分一人地雷によって命を落してしまったり、手足を吹き飛ばされてしまったりしています。ぼくは、いっどこでばく発するか分からないものが自分の身の目には見えない所にあるととてもおそろしいです。

日本から、飛行機でたった六時間の所にあるカンボジアでは、地雷をふんでしまい、肉が雑巾のように破られ、骨は砕か

れ、肉につきささり暑さと湿気の中で苦しむ人々が約五万人も暮らしているのです。世界には、こうした地雷被害者が約五十万人も暮らしているのです。

あなたは、どこでふんでしまうか分からない地雷に、自分や家族が傷付けられてしまうことを想像できますか。ぼくは、家族や自分の命がうばわれてしまうと思うと悲しみでいっぱいになります、地雷は他の兵器とちがって大人でも子どもでも相手を選ばず、ふんだ人の体をボロボロにしてしまうのです。ぼくは、そんなおそろしい兵器が世界にあつてはいけなと思います。地雷がこの世界から全てなくなることが平和への第一歩だと思います。外国では、地雷をなくすボランティアが行なわれています。自分がいつ地雷をふんでしまうか分からないのに、勇気を持ってボランティア活動をしている人がいるのです。

すべての国、すべての人々が平和になることを願っています。

春さんの昔の思い出

根戸小五年 南開 歩美

この本を初めて手にした時、表紙のかわいらしい絵とやさしい感じの題名から、ほのぼのとした物語を想像していた。ところが、読み進めていくとそれはまるで印象のちがうものだった。

中学受験に失敗したことが原因でおきたはげしい親子ゲンカによりツヨシはとつぜん家出をしてしまう。たずねた先は長

野県に住む春おばさん。そこで家出の話を打ち明けたツヨシに春おばさんは六十年もの昔のひみつの話をきかせてくれた。それは悲しい戦争のお話だった。画学生だった春さんの大切な人が戦争によって命をうばわれたのだ。

「無言館」という戦死した画学生たちの絵を集めた戦没画学生慰霊美術館の中で彼らが残したたくさんの作品を目の前にしながら、ツヨシは戦争というものをとても現実的なものとして受け止めたのではないかと思う。

私はよく祖母から戦争の話をきいている。「空しゅうがくるとすぐ道ばたにふせたのよ。食べる物がなくていつもおなかですいていたんだよ」と。でも私はそれをどこかドラマの中の話のような遠い世界の出来事のようにとらえていた。その先にこんなにもたくさんの人がなみだを流し、また戦争のきずあとをかかえて多くの人が今も生きているということを知り春おばさんの話になみだがあふれた。

絵をかき続けたいというただそれだけの願いもかなわず戦争によって命をうばわれた画学生たちを思うと、ツヨシは受験に敗れヤケになっていた自分をきつと恥ずかしいと感じたことだろう。私も全く同じ気持ちだった。日頃、気にいらぬ事があるとなつて誰かのせいにしてみたり、運が悪かったとなげいてみたり、身勝手なたい度をとつてしまうことがあるからだ。きびしい運命に逆らうこともできず戦死した人たちを思い、幸運にもこの平和な時代に生まれたことを感謝しながらくいのないよう精一杯生きようと思わせてくれる本だった。

「春さんのスケッチブック」 さ・え・ら書房

世界の平和

根戸小五年 渡辺 悠太

「春さんのスケッチブック」ぼくはそれがどのような本なのか想像がつきませんでした。この本は、もうすぐ中学生になるツヨシが家出をして春おばさんの家に行き、春おばさんの過去を聞くお話です。

家出をした夜、春おばさんは、ツヨシにスケッチブックを見せてくれました。描かれていた人は、まだ若い春おばさんでした。

春おばさんが先生だったころ、村田先生という知り合いがいました。仲が良かったのに、戦争に呼び出されてしまいました。村田先生は春おばさんの絵を描いてから、戦争に行くと死んでしまいました。ぼくは、春おばさんが、知り合いの村田先生をみにくい戦争で失ってしまったてかわいそうだと思います。

その次の日、ツヨシと春おばさんは無言館に行きます。無言館とは、戦争で亡くなった画学生たちの絵が集められている所です。集められている絵は、それぞれの画学生の思いのこもった物がたくさんあります。ぼくは、見てはいませんが亡くなった人たちは戦争がなければ死ななくてすんだのに、絵を描くことさえできず、なぜこのような運命になったのかとくやしい思いをしているでしょう。その家族も、さらに悲しい思いをしていると思います。

ぼくはたくさんの人が亡くなり悲しむから、戦争はいけなと思います。なぜ、戦争をするのでしょうか。しなければ、たくさん犠牲者を出さなくてすんだのに……。犠牲になる人をなくすためには、世界中の人々が仲良く協力し、戦争のない世の中にする必要があります。さらにゆずることも必要です。なぜかというと、ゆずり合うとけんかが少なくなります。

ぼくも弟とけんかをします。でもぼくがゆずることもめごともおさまりおだやかな気もちです。戦争は国と国の大きなけんかです。国と国がゆずり合うことで争いも少なくなるのではないのでしょうか。世界でそれはできないのでしょうか。そして、世界中に平和な日が訪れるといいです。これ以上戦争が起らないように……。

本当の平和とは何なのか

湖北台東小六年 海老原 愛莉

日本は六十四年前まで戦争をしていて、でも今は、とっても平和です。でも、「本当に平和になったのかな」と考えます。「違うんじゃないか」と私は思いました。

それは、今でも原爆の被害者の方がいるわけであり、毎日ニュースでも殺人などの事件が絶えません。さらに、もつとつらい思いをしている人がこの世界にはたくさんいると思います。今も戦争をしている国があるのも確かで、他にも、児童労働、人身売買、地雷などの問題もあります。そんなことが自分たちと同じ世界であるんだと考えると、怖いし、それを受け持っている人がいると思うと、かわいそうだなと思います。私たちが、いやなことがあつたとしても恵まれているなあと思いました。

でも、日本はまた戦争をしてしまう可能性があるということも聞いたことがあります。とても悲しく思いました。六十年、七十年前まで戦争で、空襲や原爆でたくさんの方がなくなつて、今でも後遺症で苦しんでいる方がいるのに、そんな悲惨な

ことは、絶対に絶対に繰り返さないでほしいです。唯一、原爆が落とされた国であるというのに、とつても信じられません。また、原爆を落としたアメリカは、原爆のことを「リトルボーイ」といって、原爆を落として後悔していないと聞いて、とても悔しかったです。

できることであれば、戦争、地雷、核兵器などがなくなればいいのと思います。

あたりまえにしてはいけない

湖北台東小五年 岡部 将大

今ぼくは作文を書けます。紙がありペンがあります。家に帰るとききれいな水で手を洗え、夕食を食べる事ができます。そして何より生きています。それがあたりまえになっています。正直やるのがめんどくさくなる事があります。

ある日の夜、いつものようになにげなくテレビをつけました。すると、外国のある国の事が放送されていました。

その国は内戦がはげしく、子供も大人も勉強ができなくてたくさんの人が死んでいってしまう国だったそうです。その内戦も数年前には終わりましたが、その時使われた地雷がまだ残っていて、おびえながら学校に行っていました。それに学校に行っても自分では書くこともできず読むこともできない人がたくさんいて、それもぼくより十才も二十才も年上の人ばかりでした。でもみんな笑ってました。目がキラキラしていました。それに夢を持っていました。「学校の先生になりたい」「お医者さんになりたい」

その番組を見た後、自分がはずかしくなりました。今できる事がとても少ない人がたくさん、夢を持って生きているのに、やれる事に手をぬいたり、少しぐらいの事で負けそうになる自分が。

次の日、なんだか自分が変わった気がしました。まだまだ勉強したくてもできない人や、食べる物がなくて死んでしまう人がたくさんいます。でもぼくたちは勉強する事ができます。食べる事ができます。このことは、あたりまえではないと気付いたのです。

「平和」とは、ただ自分さえ幸せならいいのではなく、世界中の人が一人残らず自分らしく生きるようにすることだと思います。そのために、ぼくは今しっかり勉強し、沢山の人に出会い、心の根を強く、大きく育てて、必ず世の中に役立つ人になります。

僕の願い

新木小六年 大出 陸哉

「死にたくない。死にたくない。助けて、助けて…」という声が町中に広がったと思う。

一九四五年八月六日午前八時十五分。辺り一面が一しゅんにして燃えた。数万人もの命がうばわれた。目の前で下じきになった友達、やけどで亡くなった友達。目の前で見た友達はどんな気持ちだったか。僕だったら全身の力がぬけて生きるのぞみがなくなってしまうだろう。だから絶対戦争はこの世ではいけないと思う。たとえ「非国民」だとみんなに仲間はず

れにされても、「戦争をしてはいけない」とうったえ続けると思う。

戦争時代は米つぶ一つぶだつて、Tシャツ一枚だつてとても大事な大事なもの。そんなことを考えると、僕の心の中に悲しい気持ち広がってくる。家族といつしよに暮らせないそかいぐらしの子供、親はどんな気持ちで送り出したのか。子供が親から離れる時どういう気持ちだったか。小学三年生ぐらいから親子共々離ればなれになり、一緒にご飯も食べられない。家族の絆をうばう戦争。自分の思ったことも言えず相談する家族さえ近くにいない。僕だったらさびしくてさびしくて耐えきれない。

だからこそ、このようなことが二度とないようにしたい。その戦争をよろこぶ人はいないだろう。だが、戦争はいつおこるか分からない。人々が変な方向に気持ちが向いてしまうかもしれない。広島と長崎に原爆くがおとされたことは決して忘れてはいけない。そして今後の日本は平和に、そしてなによりも他の国と仲よくしてほしい。

地球上に戦争がなくなつてほしい。

それが僕の願いだ。

世界平和のリーダーに

新木小六年 山内 将輝

今、世界の子供達のなかには、食べ物がおなかいっぱい食べられなかったり、戦争で亡くなっている子供達がいることを

ユニセフ学習で知った。日本に住む僕達は、豊かな暮らしをしているけど、自分達のことばかり考えてはいけなかった。思った。

六十五年前まで、日本は戦争をしていた。だが、アメリカ軍の空しゅうや原子爆弾などにより、十五年にわたる長い戦争に敗れ、降伏した。

そして今、日本国憲法には、「平和主義」という考えがある。これは、日本はもう二度戦争をしないということだ。これは、六十五年前の敗戦が学びとったことだ。この考えにより日本はもう六十五年前のような過ちを犯すことはないだろう。が、しかし、世界では、まだ戦争・紛争が続いている。だから、僕は、過去の日本のような国を増やさないように、早く自分達の間ちがい気付いてほしいと願う。

それにもかかわらず、二〇〇一年、九月十一日に、アメリカで起きた。同時多発テロもたくさんの方が亡くなった。このように、戦争をしていない国でも、多くの方が亡くなる事件が起きている。だから、戦争・紛争をしていない国全てが平和とは、限らない。

では、平和な国とは、何だろうか。それは、住んでる人が、ごはんをおなかいっぱい食べることができ、学校に行け、病気になるれば病院に行くことができる。そんな国だと僕は思う。

平和な国について考えると、僕の住む国、日本が平和な暮らしをしている国なんだと気付いた。

だから僕は日本は、世界の国々より早くこのような国にして、他の国のお手本になってほしい。そして、日本が世界平和のリーダーとなり、他の国々を引っばってほしい。

平和について考える

並木小六年 奥 聡花

いつも私は戦争は恐ろしい事だからという理由で戦争に関する事を見たり聞いたりする事を避けていました。でも、今回平和について考えるという宿題をもらったので、戦争について、また核問題についての番組をいくつか見てみました。そしていろいろな事を考えさせられました。

一番強く感じたのは、なんて残酷なんだ、という事です。爆弾を受けて死んでしまった日本人を米兵が穴から引きずり出している所をテレビで流していました。戦争体験者はそれを見て何と言うでしょうか。何を思うでしょうか。自らの戦争体験を語り後世に受け継ごうとテレビに出て来た人達は、戦争の事を話すたびにつらそうな顔をしていました。六十年以上経った今でも、その時に自分がしてきた事を思い、自分を責め続けている人もいました。戦争がどれ程つらかったか、どれ程人々の気持ちを、心を傷つけたか、という事がひしひしとその表情から伝わってきました。

私は、やはり戦争は絶対にしてはいけないと思いました。戦争を体験した人達も、もうあんな事は二度とあってはいけない、と言っていました。私や今生きている日本人みんなが、戦争は嫌だし、起こさない、と思っっているでしょう。そして戦争をなくす運動を続けようとするでしょう。しかし、人の考え方は時代、場所によって変わります。いつ突然戦争が勃発するかは、誰にもわかりません。実際、今でも世界のあちこちでテロリストが活動し、また核爆弾の配備が進められているのです。

世界の人々みんなが心を一つにし、つながった時、戦争の悲劇や戦争を体験した人達の心の傷はいやされていくのではない

いでしようか。武装を強める国々をただ恐れるのではなく、積極的に話し合い、世界を一つにし、地球全体、世界皆で守っていくべきなのではないでしょうか。そのためにはまず、自分達のできる事を始めてみるべきなのだと思います。

今回、恐ろしい場面も沢山あったけれど、戦争について見て聞いて、考えてみて良かったと思います。私達一人一人が何をできるのか、私もこれからしっかりと考えていきたいと思えます。

戦争のない世の中

並木小六年 沼尻 悠花

私は、戦争のことをよく知りません。なので戦争のことについて書いてある本を読みました。その本で私は、戦争により、どれだけの人の命が失われ、どれだけの人が悲しみ、苦しみ、つらい思いをしたのかが、ものすごくよくわかりました。当時は、食べ物も配給制度となっており、米は一人に一日一合分ぐらいしか渡されなかったということを知り、今はスーパーへ行けば何でも買えるし、好ききらいもあるけど、当時はそんなことはいっていられなかったんだなと思うと、私はすごくぜいたくなんだなと思いました。それに、父や兄などが戦地に行ってしまったりして、はなればなれになってしまおうという、今では考えられないことがあったことも知りました。今、私にとって家族が一緒にいるというのは当たり前前の感覚だけれど、もしその家族がはなればなれになってしまったらと考えると、戦争は本当にこわくて、ひどいと思いました。戦争により、家族を失った人、家を失った人がたくさんいるということも、よくわかりました。そうした事実がわかると、とても戦争が

にくくなり許せないと思いました。そして改めて、戦争は本当にしてはいけないものだし、あってもならないものだと思います。今、こうして暮らしていることが、とても幸せなんだなあと感じました。

私は、戦争のない平和な暮らしをするためには、一人一人が命に対する意識を高め、平和や戦争について改めて考え直すことが必要だと思います。その他にも、人と人のふれあいを大切にすることが、きっと世の中を平和へとつなげてくれるのではないかと思います。これからの世の中を築きあげていくのは私たちです。だから私は、未来を戦争のない平和な世の中のできるように、努力していきたいです。

平和について考える

布佐南小五年 今村 歩夢

ぼくは、平和についてあまり考えたことがありませんでした。なぜなら平和な今の日本に生まれたからです。でも、八月に兄が長崎へ行ったことがきっかけで平和について考えてみました。

平和は争いのないことです。争いの中には戦争があります。その中でも原ばくはとてもひさんなものです。

ぼくは、アビスタで『ヒロシマナガサキ』という映画を見ました。被ばく者の話から、原ばくはとてもおそろしい事や、家族や大切な人を失った辛さや悲しみが伝わりました。米軍の投下した一発の原ばくは一瞬にして平和な町を吹き飛ばし多くの人の命をうばいました。もし今、原ばくが日本に落とされたらと考えるととてもこわくなります。

そして、戦後六十五年たつて今でも原ぼくによつて受けた放射線の被害に苦しんでいる多くの人がいることを知り悲しくなりました。

ぼくは、戦争や原ぼくからは悲しみしか生まれたいし、みんなが不幸になつてしまうので戦争は絶対にしてはいけないことだとわかりました。

それから、我孫子市平和式典に参加して、平和記念碑の前で平和都市宣言をみなさんと一緒に読みました。この平和への願いが世界中に伝わるといいなと思いました。

中学生の発表していた「平和について私達ができること」をぼくも考えてみました。家族や学校のクラスなどでみんなが仲良くすること。相手の気持ちを考え、思いやりを持ち、悪口やいじめをなくすることが大切です。

今でも戦争をおこしている国があります。ぼくは争いをやめて平和な世界に一日でも早くなつてほしいと思います。平和について考えることは大切だとわかりました。

今の日本が平和で良かったと改めて思いました。これからも平和が続いてほしいです。

最近、戦争について思うこと

布佐南小六年 坂本 光理^{ひかり}

私は社会の時間などに、「なぜ日本は戦争をしてしまったんだろう、なぜ誰もとめなかったんだろう」と思う事がよくあ

ります。今、日本は不況ですが、平和で物が豊かです。

着る服もあるし、食べ物もあります。それに大切な家族もちゃんといまいます。

でも世界には戦争をしている国や、戦争で食べる物がなくて困ってる人もいます。

戦争は家族も友だちもうばってしまいます。

この間、おばあちゃんの家に行ったら、ちょうどおばあちゃんが戦争の話をしてくれました。「戦争の時はそりやもう大変だったよ。私は福島県に「そかい」したんだけど、そこがもう、ボロ家でねえ」—そんなふうに話してくれました。

私は、ある本の中で、次のような話を読みました。「イラク戦争で足に大ケガをしたムスタファくん、だけど彼は前向きにしつかりと未来へ進んでいる…」ムスタファくんは足に大ケガをし、しかも大好きなおじさんの死を目の前で見たのです。なのに、しつかり前を向いて歩いて行こうと言うムスタファくんには私は感動しました。

この時代、日本以外の国は戦争などで命を落としている国々はたくさんあります。

だから、豊かには「あたりまえ」じゃありません。「めずらしい」のです。

最近、ニュースで人が殺されたという事があっても、世界には三秒で一人死ぬ国だってあるのです。

でも世界には何秒かに、一人でも増えている国もあります。

私は大人になったら、作家になりたいけど、この作文を書いていると、ユニセフのような平和関係もいいな、という感じもします。

だから、もし作家になれたら、「戦争はいけない事なんだよ」という事を書き、一人でも多くの子供に「戦争はしちゃいけないんだ」という気持ちを持ってほしいと願います。

『半分のふるさと』を読んで

我孫子中二年 岸本 真由

私は『半分のふるさと』を読んで、平和、そして戦争について深く知り、そして考えた。

私は、今まで、本やテレビなどでも空襲や原爆、沖縄戦など日本の受けた被害についてしか知らなかった。しかし、本を読み、まず、知ったのは、日本は被爆国でもあったが、韓国や東南アジアの国々からみれば、加害者であったことだ。ドイツのユダヤ人迫害のことをずっと酷いと思っていたが、それは他人事のようにであった。しかし、日本も朝鮮人や中国人に対して虐殺などをして私にとって信じられない行為をしてきたことを知り、決してこのことを他人事と思えなくなってきたのである。

そこで、私は考えたことがある。突然、外国が攻めてきて、戦いになって占領されてしまったらどう思うだろう。更に母国語を禁止されて、自分の国の歴史が学ばなくなると、挙げ句の果てに名前までその国の物に変えろと言われたら……。私だったら我慢できない。絶えられないし、とても悲しい。けれどそのようなことを日本はやってきたのだ。国と民族の誇りを踏みにじり、人々の心に大きな傷跡を残した。そのことを今まで知らなかった私は衝撃を受けたし、今まで知らなかったことをとても恥ずべきことだと思った。

日本はアメリカから大空襲を受けたり、広島、長崎に原爆が落とされた唯一の被爆国で被害者でもある。どっちに正義があり正しいか、どちらが悪いなどいえないし私には分からないこともある。しかし、だからこそ日本が加えた被害も知らなければならぬのだと思う。それを知った上で、生活をしていかなければならないと考えた。そうでなければ、また当時と

同じようなことが繰り返されてしまうかもしれない。お互い傷つけ合い、最後の最後まで大きな傷を作ってしまう戦争を。

「これから、を描き直す」

我孫子中二年 久保田 涼香

私は、今年の夏、学校代表として平和記念式典派遣に参加してきました。長崎原爆資料館、浦上天主堂遺構も見ました。いくつものレンガを積み重ねて造られていました。それらの場所で様々な原爆の傷跡を見てきました。

また、私と同じような平和事業参加生徒と「今は平和なのか」「平和とは何か」「どうすればよいか」を他校の生徒同士で集まり、話し合いました。私の意見は、「最近の報道を見ると、殺人や覚醒剤などの様々な問題が取り上げられている為、平和ではないと思う」と考えました。でも、平和という言葉では基準が分かりません。なので、平和にするためには、大統領や総理がどうにかする、一人一人が協力する、と言った当たり前なことだけではなく、自分の中の「平和の基準」を一つひとつ解決していく、というのも大切なのだということを話し合いの中から導き出しました。

このような話も聞きました。お店でご飯を食べているときです。式典に参加した私たちにおじいさん、おばあさんが話しかけてくれました。原爆について話してくれました。このお二人は被爆者の方でした。ずっと平和でいてほしい、核戦争なんてしてはいけないと何度も何度もおっしゃっていました。その言葉はぐつと心に響きました。私も色々質問し、それに対しても良く教えてくださいました。おじいさんたちには六四年前のことを思い出してしまい、胸が辛くなったのではないか

と思いましたが、これからの平和を考える上で貴重な体験となりました。

今回体験してみて、「平和についての尊さ」「命の大切さ」を心から感じることができました。また、これからは私たち若者が引き継ぎ、次の世代の人々に戦争のことを伝え、多くの人に平和について知ってもらい、これからの世界を新しく描き直さなければならぬと思いました。

今、平和について思うこと

湖北中三年 久我 昌江

現在、「核の時計」（世界終末時計）は、世界滅亡五分前をさしています。「核の時計」とは、アメリカの科学者達が、核戦争の起こる可能性を協議し、専門誌に発表しているものです。世界滅亡を午前0時に見立て、地球の危機を知らせています。とすると、五分前とはとても高い危険度だということが理解できますか。これは、冷戦下の一九八七年以来の危険度なのです。しかし当時、この時計を十四分も戻した人がいるのです。ミハイル・ゴルバチョフ旧ソ連・元大統領です。一九八七年米ソ中距離核戦力全廃条約を取りまとめ、冷戦終結に貢献しました。この条約取りまとめの背景には、広島と長崎があったのです。一瞬にしてすべてをうばう核兵器の恐ろしさを目にし、平和のための努力をしていかなければならない、と感じたからです。

「平和のため」とよく耳にしますが、平和とは何だろう、と疑問になります。よく考えれば不思議なことで、考えれば考

えるほど難しいと思います。なぜならば、平和という意味は多くのニュアンスがあるからです。例えば、仕事に追われ、休みがないために平和を感じとれない、休みが唯一の平和だ、という人や、体に病気を抱えている、病気が治り普通の生活ができることが平和だ、という人など、さまざまな平和があります。ここで、平和ということに、共通点があることを気づきましたか。共通点は「幸せ」です。幸せがあるから平和があるのです。幸せなくて平和は語れません。大きな幸せ、ほんの小さな幸せでも、それが連鎖すれば、いずれ世界平和へ導ける鍵となる、と考えています。またそれにより、「核の時計」が一分、いや一秒ずつでも戻れば、世界での考えが変わり、理解し合えるようになると思います。何より「平和」とは私達人間に一生関わる問題なのです。この問題を解いていくうちに、やがて「幸せ」へと答えが出たあなたは、「幸せ探し」を試してみてもどうでしょうか。

平和学習にて学んだこと

湖北中二年 今 和香菜

私は、被爆六十四周年長崎原爆犠牲慰霊平和祈念式典派遣中学生に参加させていただきました。私は戦争を経験したことがないので戦争についてあまり知りませんでした。この経験をしてとても大切な事に気づくことができました。今から約六十四年前の長崎では原子爆弾によって、その年の十二月までに約七万四千人の方々が亡くなられ、苦しめられた事を知りました。長崎青少年ピースフォーラムでは、被爆者の山脇さんからとても貴重なお話を聞くことができました。私はその

話しを聞きながら恐怖が込み上げてきました。

そして私達の本当の目的、長崎平和式典では原爆によって亡くなられた方々への祈りを捧げることができました。私が黙祷をしている時に思った事は、同じ日に同じ時間普通に生活していた人々がたった一発の原爆によって命を落とされたことへの悲しみや恐怖、そして怒りでした。この時、もう戦争なんてしてほしくない、核兵器などはこの世界から追放しどの国の人でも、こんな悲しみを味わってほしくないと強く思いました。

私達若者は普段の生活で、普通に起きて、普通に食べて、普通に住む家があると思います。この何げない生活はとても平和な事なのです。今現在でも戦争している国、核兵器を持っている国はこの世界でたくさんあります。戦争している国では、私達と同じ年代の子供達が何人も戦争にでています。そしてその度に、尊い命が失われていくのです。平和な世界へ一歩でも近づくためには、一人一人が平和な事を一歩ずつ踏み出していかなければならないと思います。私はこの経験を活かして一人でも多くの人に話していきたいと思います。そして、世界の人々が普通に起きて、普通に食べられる世の中になってほしいと思います。

平和の国日本

布佐中二年 飯田 珠未

平和とはどのような状態なのかと考えた時、私は皆が仲良しであることを思い浮かべました。人によっては、道ばたに咲

いている花を見て小さな幸せを感じる事が平和だと思うことでしょう。しかし、私は、世界の国々といろいろなことを比較することで、平和だと感じています。たとえば、世界には今でも戦争している国もあります。また、貧しくて食べ物もない国もあります。このような状態を見ると、私は自分の暮らしを見つめ直し、日本は、安心して暮らせるのだから、平和な国だと感じるので。

しかし、本当に日本は「平和の国」と呼べるでしょうか。確かに核に関しては、日本は世界の国で唯一の被爆国であり、もう二度とこんな事がないようにと取り組んできました。そのおかげで太平洋戦争後、他国と争うこともなく、国民皆が平等に権利を受けることができるすばらしい国となりました。しかし、二度と戦争は起こさないぞという決意が薄れてきているように感じます。

また、毎日のニュースでは殺人事件があたりまえのように流され、当たり前のように人が死んでいます。このような惨状が毎日報道されているのに本当に平和と呼べるでしょうか。世界の国々と比べてみても日本はそのような事件が少ないので、まだ平和のように見えますが、これで良いのだろうかと疑問を感じています。しかし、私たちはこの現実をふくめて日本を平和の国と呼んできました。

平和とは何か。平和の代表は今の日本であると誰もが言い、そして、あたりまえの事だといって平和について考えることありませんでした。しかし、私たちには今の日本が平和の国であると胸を張って言えません。「日本は平和なのか」私たちは平和についてももう一度考えてみるべきだと思いました。

今の日本平和と世界

布佐中二年 齋藤 杏子

私達はたくさん犠牲の上に生きています。そう感じたのは過去に何度か見た戦争の映像からでした。私達が今暮らしている日本は世界で唯一原爆の被害をうけた国です。

私達が今こうして戦争や酷い争いも無く平和に暮らしていけるのは過去にあつたたくさん代償と犠牲があつたからです。こうして日本は世界的に見ても平和な国と言われています。しかし、それは本当に平和と言えるのでしょうか？今こうして生きている間にも世界のどこかで命は失われてしまっているのです。

日本だけが平和それは本当の平和ではないのではないでしょう。こう感じているのはきっとニュース、新聞といったメディアに世界の争いが写し出されているからだと思います。先日も、バグダッドなどで爆弾を使った連続爆破テロがありました。それはとても悲惨な映像でした。このようにたくさんの方が傷つき、いくつもの尊い命が消えてしまっているのでやはり本当の平和とは言えないと思います。自分だけ、日本だけ平和なら良いそう思っている人達もいると思います。ですがそれは個人の思いでしかありません。ほんの少し見方を変えて回りを見てみれば私達の周りにはたくさん傷ついている人達がいるのです。

そしてこの世の中の状態を変えていくには一人一人が平和にしていこうと強い思いを持って生活をしていくしかありません。争いが起きて傷つくのはいつだって弱い子供や高齢者なのです。

私は、一人でも多くの方が平和とは何なのかと考え貫える事を祈っています。そして私自身もこれからの生活の中で平和

の事を考えて私の人生を歩んでいきたいです。

平和へ感謝！

湖北台中三年 高木 佳枝

ふと思う…。世界は一つで、その中にたくさんの人達がいる。たくさんの人達がいるこの世界の中で、私達人間だけがお互いを憎み合い、傷つけ合って、殺し合って、どうしてこんなにも、皆が孤独で悲しい世界をつくりあげてしまったのだろうか…。

二〇〇八年の夏に、私は我孫子市の広島派遣で、広島の被爆者の方のお話を伺いました。その言葉の中に、今でも忘れられない言葉があります。それは、「友がいたから生きられた」という言葉です。原爆によって、なにかもを失った時、最後に残ったのは友だった。その友の存在だけが、唯一生きる希望だった。現代の平和な日本に暮らす私には、大勢の大好きな友達がいます。帰る家があります。「おかえり」と言ってくれる、大切な家族がいます。いつも、なにげなく一緒に過してきました。いつもそばにいてくれることを、あたりまえのように思っていました。しかし、改めて、とても大きくて大切な存在だということに気づかされました。そしてもう一つ、広島派遣後に、考えたこと。それは、すべてのものに感謝する心を忘れずに、今を大切に生きるということです。戦争でたくさん辛い出来事に直面しながらも、それを乗り越えて精一杯生きて下さった方がいたからこそ、今の私達がいるのです。今の平和があるのです。私たちは、この命をもっと大切にし

ていかなければいけないと思うと同時に、平和の中に暮らせることに感謝したいと思います。

本当の平和は、世界の人が皆で築いていくもの、心で感じるものだと思います。この世界に住む、たくさんの違いをもつた人達と互いに相手を理解しようと努力すれば、きっといつか平和を築いていけると信じたい。しかし、十五歳の私はまず、身近な人を大切にするところから始めたいと思います。今ある幸福―平和を無くさないように、見失わないように、ずっと大切にしていきたいと思えます。

平和になるその日まで

湖北台中三年 富塚 祐輝

第二次世界大戦が終結して六十数年が過ぎた今、日本は世界の「平和」の象徴になった国の一つである。

僕も含めて戦争という恐ろしい出来事を体験せずに生きている人は年々増加している。しかし、悲しい事に世界大戦が終結して六十数年過ぎた今も、世界中のどこかで毎日戦争が起きている。なぜ戦争は終わらないのか。なぜ罪のない人まで犠牲になるのか。僕にはまったく理解できない。

今、ニュースで話題の沖縄の基地問題について僕はとても関心がある。日本は独立国という名目ではあるが、戦後の政治や国の外交を見ていると本当に独立しているとは思えない。もし、独立国というのなら、沖縄に基地はいらないうか。けれど今、この我孫子に基地を作ると言われたら、僕は「賛成」という札しか上げられない。これが現状だ。

なぜなら、自分達のみで国を守ることができないからである。太平洋戦争のとき、僕の祖父は戦争へ行かされた。しかし、今は徴兵令もなく、戦争へ行かされることもない。平和で豊かな日本では『ニート』と呼ばれ、仕事に就こうとしない若者もいる。そのような若者達は、今、危機感はないのだろうか。祖父の時代は、自分の身を国のためにと戦争へ捧げた若者が多い。そのような時代の人々が、今の仕事に就こうとしない若者を見たらどう思うだろうか。こんなに平和ボケした僕たちは何よりも「感謝」という言葉を、胸に刻んでいかなければならないと思う。

死んで良い人間など、この世にいない。そして、「人間は物や武器ではない」という事を戦争を行っている国に言いたい。戦争で一体何をやるのか。失うものだけではないか。

戦後の日本を築き、国を平和の道へ導いてくれた人々に感謝したい。そして、無意味に人が死なない世界をどうしたら創れるのか―考え続けたい。

今を平和にするために

久寺家中二年 田川 由樹子

戦争が終わり皆が幸せに暮らしている今、私達はそんな暮らしが当たり前になっています。しかし、実際戦争で亡くなってしまう人々や家族がバラバラになってしまった人達は、はたして幸せだったのでしょうか。そんな人々の分まで今この世界をもっと平和にしていかななくてはならないと私は思うのです。

そこで私は、まず身近にある戦争を探しました。そして見つかったのが「いじめ」です。

私が中学校に入学して数ヶ月たった頃、私の身のまわりには友達で溢れていました。そんな中教室でただ一人だけ寂しそうにしている子がいました。私はその子が気になり声をかけました。するとその子は安心してように微笑んでくれました。話も合うし、明るくて良い子で自然に私はその子と毎日を通りかかるとなっていました。しかし、ある日数人の女の子に呼ばれて「あの子にあまり近づかない方がいいよ」などと、その子にとって失礼な事や悪口を言いました。私は、そんな女の子達に「自分が言われて嫌な事は人に言わない方がいいよ」と言い返しました。すると、女の子達は何も言わずに去っていきましました。

私はこの事があっていじめについて深く考えるようになりました。すると、その子に対する陰口や体の特徴でからかったりと、本格的ないじめが始まりました。しかもそれは一人でなく数人でした。私はその子をかばいながら先生に相談したり仲の良い子に協力してもらい、なんとかいじめを止める事が出来ました。そこで私が思った事は一人でいじめる勇気がなく多数でいじめてしまうのは卑怯だと思いました。

いじめは決して楽しい事ではないし、やっつけて嬉しくもありません。だからもうこんな事がなくなるように今、明るくこれからの世界が幸せになるように私が出来る平和作りをしていきたいと思えます。

「平和」にかける願い

白山中一年 池田 桃

「原子爆弾」この核兵器で何万人の命が奪われただろう。

今から六十五年前、戦争は終わった。そのきっかけとなったのが、広島・長崎での原爆投下だ。人の命をこんなにも奪った原爆は本当に残酷で醜いものだった。

初めて原爆の写真を見た時、とても怖くて、思わず目をそむけてしまった。人間をこんなにボロボロにしてしまう核兵器があったということに、私は驚きと同時に怒りが込み上げてきた。原爆の被害はこれだけではない。今もまだ、放射線の被害を受けている人や、心に深い傷を負った人がたくさんいるのだ。この世に「爆弾」という人を苦しめるだけのものは必要ないと思う。あつてはいけないものだと思う。

もし、私の大切な人が戦争で死んでしまったとしたら、どんなに辛いだろう。私の祖父は、十才の時、戦争でお兄さんを亡くした。戦争へ行くお兄さんを見送ったのが最後で、それ以来二度と帰ってくることはなかったという。死因は爆弾によるもので、運悪く祖父のお兄さんにだけ当たったそうだ。当時のことを話す祖父は、さびしそうで、自分にも少し気持ちがわかった気がした。

「お国のために死になさい」

私がそう言われたら、迷わず首を振るだろう。きっと昔の人もまだまだやりたいことはたくさんあつて、死にたくなかったはずだ。でも、それ以上に日本の勝利にかける思いが強かったのだろう。

二度と戦争という過ちを繰り返さないためには、戦争の恐ろしさを伝えていかなければならない。戦争経験者は高齢者ばかりで、これからもっと少なくなる一方だが、それなら私達が語り継いでいけばいい。みんなの心の中に「平和」を願っている気持ちがあるのだったら、戦争なんて起こるわけがないはずだ。

「平和な世界になるための願い」

白山中二年 小林 彩佳

戦争とは無意味である。ほとんどの人は、このような考えだと思う。では、なぜ戦争はなくなるのだろうか。それは一部の人が個人や国家の利益だけを考えて、戦争を起こしてしまうからだと思う。尊い命よりも、それらを考える人は、命の重さをきつと理解できない人なのだろう。利益を優先する戦争は心を貧しくするだけである。

第二次世界大戦では、自国の利益のために一部の権力者が国民を巻き込んだ戦争を起こし、たくさんの尊い命が失われた。広島と長崎に落とされた原爆は、一瞬にしてたくさんの命を奪った。世界で唯一の被爆国である日本は、もっと核兵器の恐ろしさを訴えるべきである。また、それは被爆国として訴えていく責務であると思う。チェコのプラハでアメリカのオバマ大統領が、核兵器の廃絶を訴えた。アメリカは核使用国として、日本は被爆国として、世界から核兵器をなくす責任がある。日本には世界に誇れる、「核をつくらない・持たない・持ちこませない」という、日本政府の核兵器に関する原則、非核三原則がある。人を殺すための核兵器など、世界には必要ない。一日も早く、この世界から核兵器がなくなるように、核保有

国は非核三原則を提唱すべきだ。核保有国のトップの人々は直ちに行動すべきである。また、私達はその行動に協力しなくてはならない。

命の重さは計り知れない。尊い命を奪うことは、他人にはもちろん、自分にも許されない。ゆえに、どんな理由があっても尊い命の奪い合い、つまり戦争は絶対にしてはいけない。しかし、戦争のない平和な世界にするためにできることは私達、中学生には多くはない。その中でできることは、まず自分を大切にすること、周りの人を大切にすることだと思う。

そのように考える人が増えれば、戦争など絶対に起きないはずだ。世界平和への道のりは一人ひとりの意識次第だと思う。